

平成27年度八重山群島病害虫発生予報第7号(10月予報)

I 10月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	30	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	30	40

(平成27年9月24日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	25.9	28.7	23.7	204.5	158.4

(沖縄気象台発表・統計期間1981~2010・資料年数30年)

II 10月の発生予報および防除上の注意事項

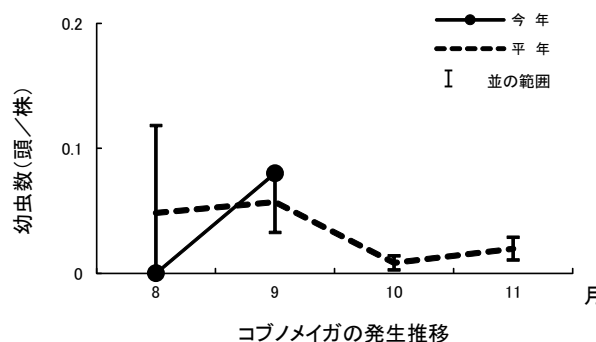
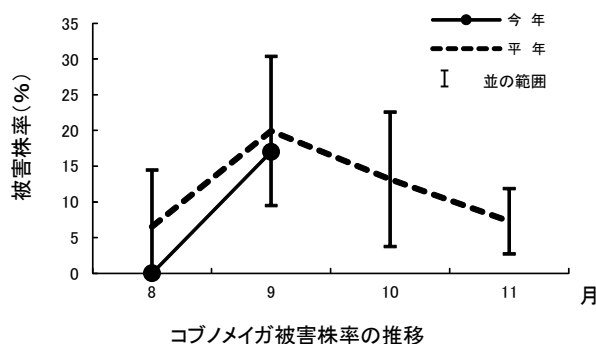
1 水稲(二期作)

(1) コブノメイガ

発生程度 : 並

予報の根拠

9月下旬の調査の結果、被害株率は17.0%(前年11.8%、平年19.9%)と平年並で、株当たり幼虫数は0.1頭(前年0.1頭未満、平年0.1頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 老齢幼虫には薬剤の防除効果が極端に低くなるので、薬剤防除適期は粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期から約1週間後である。
- 窒素肥料の過用は避ける。

○ 斑点米カメムシの防除対策

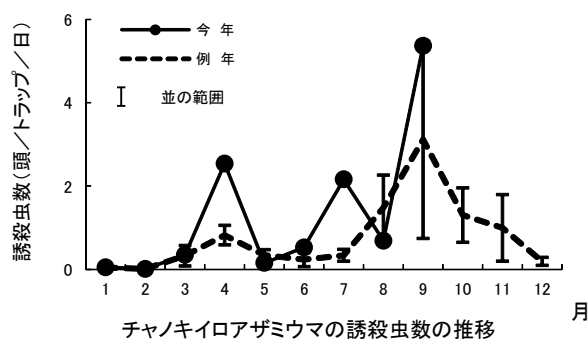
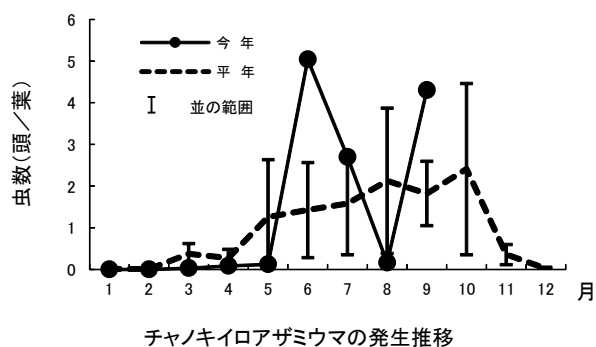
- 9月下旬の調査の結果、出穂後の水田に斑点米カメムシ類の発生が確認された。
- 畔や水田周辺の雑草地から出穂後に水田内に移動するため、定期的な除草などにより密度を抑える。
- 出穂期前後の除草はカメムシ類が水田に移動するので極力控える。
- 薬剤防除は、基本として穂揃期とその7~10日後の2回実施する。

2 さとうきび

- イネヨトウの防除対策
 - a 9月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は0.1%（前年0.4%、平年0.2%）と平年より低かった。
 - b 9月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.0頭（前年2.5頭、例年2.2頭）と例年より少なかった。
 - c 卵は塊で産み付けられ、ふ化した幼虫は葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
 - d 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
 - e ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
 - f 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
 - g 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
 - h 平成27年度病害虫発生予察注意報第1号(平成27年4月30日付)参照。

3 マンゴー

- (1) チャノキイロアザミウマ
 - 発生程度 : やや多
 - 予報の根拠
 - a 9月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は4.3頭（前年0.5%頭、平年1.8頭）と平年より多く、特に一部施設で多かった。
 - b 9月の黄色粘着トラップ当たり日当たり誘殺虫数は5.4頭（前年0.5頭、平年3.1頭）と平年並であった。



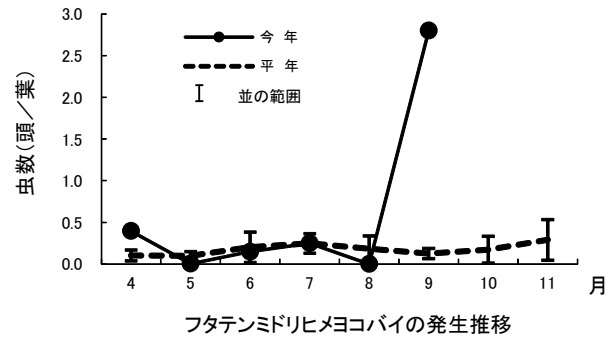
<防除上注意すべき事項>

- a 不用な新葉は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
- b 新梢をよく観察し、初期防除に努める。
- c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- e 平成27年度病害虫発生予報第5号(平成27年7月27日付)コラム参照。

4 オクラ

- (1) フタテンミドリヒメヨコバイ
発生程度 : 多
予報の根拠

9月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は2.8頭(前年0.3頭、平年0.1頭)と平年より多かった。



<防除上注意すべき事項>

- 多発すると吸汁加害により葉の萎縮や黄化が進み生長が阻害されるため、葉裏をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。
- 発生源となる圃場周辺の雑草を除去する。